Jābir b. Zayd al-Azdī の誤りであろう。34 頁の al-Ṣalṭ b. Mālik とあるのは al-Ṣalt b. Mālik の、51 頁の Abū Ḥāshim とあるのは Abū Hāshim の、また同頁の Faḥr al-Dīn al-Razī とあるのは Fakhr al-Dīn al-Rāzī の誤りであろう。72 頁の lam tajiz al-walāya la-hum は動詞 jāza の活用を考えれば lam tajuz al-walāya la-hum であろう。126 頁の inqyād は inqiyād の、148 頁の khalā'q は khalā'iq の、188 頁の takhdīb は takdhīb の、236 頁の kabīr al-ma'āsī は kabīr al-ma'āṣī の誤りであろう。226 頁の dafūr については dufūf の誤りであろうか。

また訳語についてもほとんどにおいて正確な表現が用いられているが、評者は以下の点について疑問を感じた。290 頁で本来「売り手」という意味の shārī に対して「戦士」という訳語をあてており、読者としては説明が欲しいところである。301 頁で shāriyayn（shārī の双数形）に対して「2 人がともに神のために自らの魂を売って戦うこと」と訳語をあてており、また 304 頁で「魂を売った者（al-shārī/pl. al-shurā）すなわち戦士」とあることから、自身の魂を売ってジハードを行うという意味であろうと思われる。そもそも本書でたびたび登場する「魂を売る」という表現については 50 頁で説明があり、クルアーン 2 章 207 節[5] をもとにした表現であって「神との肯定的・積極的な関係を表す語」と簡潔に述べられるにとどまる。この表現はイバード派を論じる本書にもたびたび現れる重要な表現であり、同派の学者たちのクルアーン注釈学などを引き合いにしてこの語の用法について詳細な解説があればより読者の理解の援けとなったのではないだろうか。

また、293 頁で「卓越する、勝る」という意味の動詞 faḍala の受動分詞である al-mafḍūl に「就任が望まれる者」と訳語をあてているが、イマームが最善の者（al-afḍal）であるべきか否かという文脈においては「卓越される者」、すなわち単に最善の者以外の人物を意味すると考えられる。そのため、「最善でない者」あるいは「相対的に劣後する者」などと訳すべきであったろう[6]。

本書は主に東方イバード派の共同体論に焦点を当てたものであり、本書のみでイバード派の全貌を俯瞰することはできないという点について、評者として強調しなければならない。というのも、本書で明らかにされるイバード派思想は、イラクからアラビア半島にかけての東方イバード派が 2/8 世紀から 6/12 世紀に展開した宗教的共同体にかかわる議論に焦点を絞っているが、イバード派は北アフリカで栄えた「西方イバード派」も存在し、あるいは 19 世紀からは遠くザンジバル島でも信仰されてきた。その成立から現在まで様々な地域で信仰され続けた同派の思想を包括的に知るにはより多角的な検討が必要となろう。

イバード派は信徒の数が少ないこともあり、これまで本邦ではほとんど注目されることがなかった。しかしながら著者も述べる通り、その思想と宗教実践はスンナ派やシーア派に匹敵するものであるといえる。本書はイバード派共同体論についての精緻な分析であると同時に、同派思想に注目する意義を知らしめた。今後イバード派思想研究にはさらなる拡充と深化が求められる。

（西山　尚希　東京大学大学院人文社会系研究科）

Arjan Post. 2020. *The Journeys of a Taymiyyan Sufi: Sufism through the Eyes of ʿImād al-Dīn Aḥmad al-Wāsiṭī (d. 711/1311)*. Leiden: Brill. xvi+321 pp.

本書は、13–14 世紀のアラブ世界で活躍したハンバル学派の学者であるイブン・タイミーヤ（Taqī al-Dīn Aḥmad ibn Taymīya, d. 728/1328）を中心とする学者サークル内で、スーフィズムとはいかなるものであったのか、いかなる役割を果たしていたのか、いかにして実践されてきたのかについて、ワースィティー（'Imād al-Dīn Aḥmad al-Wāsiṭī, d. 711/1311）というスーフィーを通して明らかにしようとするものである。

著者はルーヴェン・カトリック大学の准教授であるアルジャン・ポストである。彼が 2017 年にユトレヒト

5） この節について、スンナ派のクルアーン注釈者であるイブン・カスィールは、ジハードを行う者全てを指すという解釈が多数意見であるとする（Ibn Kathīr, *Tafsīr al-Qur'ān al-'uẓmā*, vol. 1, Istanbul, 1984/5, 358–361）。また、十二イマーム派の学者であるシャイフッターイファ・トゥースィーは、ジハードや勧善懲悪（amr bi-al-ma'rūf wa nahy 'an al-munkar）を行う者たち全てを指すという見解を伝える（Shaykh al-Ṭā'ifa al-Ṭūsī, *al-Tibyān fī tafsīr al-Qur'ān*, vol. 3, Qum, 1996, 280–282）。

6） W. Montgomery Watt, *The Formative Period of Islamic Thought*, Edinburgh, 1973, 163.

大学へ提出した博士論文をもとに、本書がブリルから Studies on Sufism の第6巻として上梓された。彼はワースィティーの他にも、バアラバッキー（Zayn al-Dīn ‘Abd al-Raḥmān al-Ba‘labakkī, d. 734/1333）という同じくイブン・タイミーヤのサークル内で活動したスーフィーに関する論文［Post 2016］も発表しており、今後の研究が期待される新進気鋭の研究者の1人である。

イブン・タイミーヤとスーフィズムの関係、ならびにハンバル学派とスーフィズムの関係については、これまでに多くの議論が重ねられてきた。しかし、彼をスーフィーとして位置付けることには疑問が呈されており、また彼自身がいかなるスーフィズム思想を抱いていたのかについては、現在に至るまで明確な答えが得られていない。そのため、彼の周辺人物のスーフィズム研究が近年盛んとなっている。彼の弟子のイブン・カイイム・ジャウズィーヤ（Muḥammad ibn Abī Bakr ibn Qayyim al-Jawzīya, d. 751/1350）がその最たる例であろう。彼と同じく、ワースィティーはイブン・タイミーヤの弟子であった。また、イブン・タイミーヤから「当代のジュナイド」と高く評価されるなど、当該研究分野における彼の重要性は著しい。その一方で、これまでにワースィティーのスーフィズム思想に関する研究は依然として進んでこなかった。その理由として、近年に至るまで彼の著作が刊本化されていなかったことなどが挙げられると著者は指摘している。

本書は、ワースィティーの物理的な旅（riḥla）を追った第1部と、霊的な旅（sulūk）について扱った第2部から構成されている。章立ては以下の通りである。なお、本稿でのアラビア語の転写は原書に従うが、人名や評者の見解を記した箇所では『岩波イスラーム辞典』の転写方式に従う。

序章

第1部
序論――ワースィティーの伝記
第1章　出発、壮観なリファーイーの要塞
1. ワースィティーの初期背景
1. 1. イルハン朝下のワースィト
1. 2. イルハン朝とリファーイー教団の友好関係？
2. ワースィティー対リファーイー教団
2. 1. リファーイー教団におけるシャイフの領域
2. 2. リファーイー教団の実践――サマーウと霊験
2. 3. リファーイー教団の描写――無律法主義者か主流のスーフィーか？
3. ワースィティーのイラクでの最後の年
3. 1. 醒めたシャーフィイー学派の法学者
3. 2. バグダード学派のスーフィー

第2章　アレクサンドリアにおけるシャーズィリー教団の学者的スーフィズム
1. エジプトの状況
1. 1. 不況と戦争
1. 2. エジプトにおけるスーフィーの中心地？
2. アレクサンドリアのシャーズィリー教団への加入
2. 1. 初期シャーズィリー教団のネットワーク
2. 2. 初期シャーズィリー教団の教義
2. 3. シャーズィリー教団の成功

第3章　最終行程――異端から保護された教派へ
1. カイロの修道場と存在一性論学派のスーフィー
1. 1. 修道場のスーフィー
1. 2. 合一派の異端

2. 保護された教派――ダマスカスの伝承主義者とイブン・タイミーヤのサークル
2. 1. ダマスカスにおけるスーフィズムとハンバル学派の敬虔さ
2. 2. イブン・タイミーヤと共に――イスラームの師の下でのスフバ（ṣuḥba）
2. 3. イブン・タイミーヤのサークルのスーフィー導師

第 2 部
序論――スーフィズムとしてのスルーク（道程）
第 4 章　伝承主義者のスーフィズム
1. 導入
2. ムハンマドの道（al-tarīqa al-Muḥammadiyya）
2. 1. ムハンマドの道の起源
2. 2. ムハンマドの道の実践方法
2. 3. ムハンマドの道における導師の役割
3. 健全な神のマアリファと彼の属性
3. 1. 神のマアリファとは？
3. 2. 容認 vs 比喩的解釈
3. 3. 方向の決定的重要性
4. 何がスーフィズムではないのか――スーフィーの逸脱の論駁
4. 1. スーフィーのサマーウ
4. 2. 哲学とカラーム
4. 3. 存在一性論学派
5. 結論

第 5 章　目撃の階級を通じて愛する者へと進行すること
1. 導入
2. 実践にマアリファを取り入れること
2. 1. 神名と属性を通した僕性
2. 2. 目撃の位置としての心
3. 目撃の階級の順序（tartīb al-mashāhid）
3. 1. 心による神性の目撃（mashhad al-ilāhiyya）
3. 2. 心による主性の目撃（mashhad al-rubūbiyya）
3. 3. ワースィティーの諸導師と、神性と主性に関する彼らの指導
3. 4. 心による目撃の他の階級
3. 5. 霊魂による合一（al-jamʿ）と単一性（al-fardāniyya）の目撃
4. 結論

終章　いかにして旅は続くのか

序章ではまず、ワースィティーとイブン・タイミーヤのサークル、スーフィズム、また伝承主義について論じており、本書の分析枠組みが提示されている。

上述したように、第 1 部はワースィティーの物理的な旅路――彼の故郷のワースィトから、彼の死没地であるダマスカスに至るまで――を扱っている。この旅は彼の自伝に基づくものである。第 1 章はイラクにおけるワースィティーの遍歴についてである。ワースィトやバグダードといった地域におけるリファーイー教団と彼の関係について論じられており、いかにして彼の求める「正しい」スーフィズム像が醸成されたのか、また同教団の特徴は何かなどについて示されている。

第 2 章はアレクサンドリアへと移ったワースィティーとシャーズィリー教団について取り上げる。彼は現

地のシャーズィリー教団に加入し、そこでスーフィー導師に師事した。同教団は法学を重視しており、リファーイー教団のシャリーアから逸脱した実践を嫌ったワースィティーにとって好ましいものであった。しかし、師弟（murshid-murīd）関係において導師の役割を非常に重視する性格と、アシュアリー神学派のカラームについて彼は意見を異にし、彼の旅は依然として続くこととなった。

第3章は、旅の最後の行先であるダマスカスと、その前に立ち寄ったカイロでのワースィティーについて論じている。彼はおそらくカイロのサイード・アッ＝スアダー修道場に滞在しており、そこでイブン・アラビーの思想に触れ、彼の学統を汲むスーフィーたちを「合一主義（ittiḥādiyya）」の異端として批判した。やがてワースィティーはダマスカスへ向かい、そこでイブン・タイミーヤに師事し、シャーフィイー学派からハンバル学派へと転向することとなった。彼にとってイブン・タイミーヤは年下ではあったが、内外両面における師であった。また、本章ではイブン・タイミーヤのサークルについても詳細に論じるなど、示唆に富む議論を提供している。さらに、従来の研究における争点であった、カーディリー教団とイブン・タイミーヤらハンバル学派の学者たちについても言及している。

第4章以降は、ワースィティーが実際に説いたスーフィズム思想を扱う第2部であり、彼の著作の分析を著者は提示する。第4章はワースィティーによるスーフィズムの教えについてであり、著者はそれを明文（nuṣūṣ, クルアーンとスンナを指す）に基づいたもの（nuṣūṣ-based）と説明する。この章では、ワースィティーが説いた「ムハンマドの道（al-ṭarīqa al-Muḥammadiyya）」について詳述しており、その実践方法、師弟関係のあり方、彼の教えにおける伝承主義神学（traditionalist theology）の影響、彼が批判したスーフィズムの諸潮流について扱っている。

第5章は、ワースィティーの思想の鍵概念である、神のマアリファを基礎とする目撃について扱っている。ここでは主に修行方法について議論されており、目撃の進行の諸段階を詳述している。また、彼の教えにシャーズィリー教団とイブン・タイミーヤの思想がどのように反映されているかを示している。そして終章では、上記の2つの旅についての議論を概括した上で、結論を述べている。

以上、本書の内容を概観したことより、特筆すべき2点を挙げる。1点目は、ムハンマドの道である。従来の研究でジャズーリー教団のシャイフであるガズワーニー（‘Abdullāh al-Ghazwānī, d. 935/1528–1529）に帰されてきたムハンマドの道が、ワースィティーやイブン・タイミーヤによって既に用いられており、両者はともにムハンマドの道とハディースの徒の道を同一視していたと、著者は指摘する。ワースィティーはこれをスーフィズムの文脈で用い、明文を学ぶことによって預言者の霊性（rūḥāniyya）に繋がることが可能であると説いた。預言者、とりわけムハンマドを霊的指導の主たる源とし、また修行者は彼を内外両面のシャイフとすることで、ムハンマドを模倣し、常に彼を想起し、ヌスースの研究を通して彼のマアリファを得るという、彼への愛の道が説かれており、その遂行によって彼と相見えることが可能になり、預言者性の目撃（mashhad al-nubūwa）が実現されるという。さらに、預言者だけでなく、預言者の言行録を伝え、また彼に倣った教友（ṣaḥāba）の重要性も主張されている。

2点目は、ワースィティーの思想の基礎にある師たちの影響である。彼はアシュアリー学派の神学を拒否し、イブン・タイミーヤの影響下にあったことから、伝承主義神学を奉じていた。そのような正しい信条によってのみ、預言者の、そして神のマアリファを得ることができるとワースィティーは説く。しかしその一方で、彼の思想にはシャーズィリー教団の教えが反映されており、必ずしもイブン・タイミーヤの見解に従っていた訳ではなく、彼独自のスーフィズム思想を構築していたと著者は指摘している。

このように、本書はイブン・タイミーヤならびに彼のサークルとスーフィズムの関係について示唆に富んだ議論を提供しているが、以下の2つの疑問・問題が挙げられる。

1つ目は、イブン・タイミーヤのサークル内でのワースィティーとの関係について、イブン・タイミーヤとしか比較されていない点である。著者は終章で今後の展望としてイブン・カイイム・ジャウズィーヤの名を挙げ、ワースィティーと比較研究の余地があると言及しているが、アッダスが既に指摘しているように、彼は非現存ではあるものの『ムハンマドの道に関するアレッポ書簡（*al-Risâla al-halabiyya fî al-tarîqa l-muhammadyya*）』という名の書簡を著している［Addas 2015: 108］。そのため、彼の著作を多少なりとも参照すべきであったのではないかと考えられる。上記の著作からわかるように、彼もワースィティーと同様に、後者が好んで用いた「ムハンマドの（Muḥammadī / Muḥammadīya）」という語を使用していたためである。

2つ目は、本書のタイトルにも関わることであるが、ワースィティーを「イブン・タイミーヤ流のスーフィー（Taymiyyan Sufi）」として括ることの是非についてである。たしかに彼はイブン・タイミーヤに師事し、多大なる思想的影響を受けているが、第5章で示されているように、かつて所属していたシャーズィリー教団の教えを取り入れながら、独自のスーフィズム思想を形成することに成功していた。著者は終章でこの疑問に対し、イブン・タイミーヤのサークル内におけるスーフィー導師としてのワースィティーの役割を強調するために用いているため、この呼称は依然として有効であると論じている。しかし、彼がそうした地位に落ち着いたのは晩年のことであり、その期間だけを指し、またサークル内における彼の導師という役割のみに注目するようなこの呼び方は適当ではないように考えられる。イブン・カイイム・ジャウズィーヤをはじめとする他の弟子が「イブン・タイミーヤ流の」と形容されることはそう多くない。むしろそうしたラベリングは避け、師の影響を考慮しながらも個人の思想の独自性を見るべきであるというのが近年の研究の潮流である。そのため、スーフィーであると同時に法学者や神学者でもあった彼の立場・思想をより正確に表すためには、「伝承主義スーフィー（traditionalist Sufi）」もしくは「ハンバリー・スーフィー（ḥanbalī Sufi）」が代わりに用いられるべきであろう。そうすることで、イブン・タイミーヤ研究という1つの文脈だけでなく、より広い視座からワースィティーを捉え直すことができるのではないかと考えられる。

最後に若干の課題を提示したが、これは本書の価値を損なうものではない。本書はこれまで等閑視されてきたハンバル学派の思想家であるワースィティーの思想を、膨大な一次資料をもとに分析し、明らかにしたものである。これにより、ハンバル学派の学者および伝承主義者のスーフィズムの在り方の一例が提示されることとなった。また、従来の研究で不明瞭であった、ハンバル学派の思想家とタリーカの関係についても、非常に示唆に富む議論を提供している。さらに、本書で提示されたワースィテーの思想の鍵概念である「ムハンマドの道」や「目撃」が、後世の思想家にどの程度継承されたのかについての議論が今後待ち望まれる。本書はスーフィズム思想やイブン・タイミーヤだけでなく、マムルーク朝、伝承主義、タリーカなどに関心のある読者にとっても非常に有益なものである。本書により、当該分野における今後の研究の発展がより一層期待される。筆者自身もその一翼を担っていきたい。

〈参照文献〉

Addas, Claude. 2015. *La maison muhamamdienne: aperçus de la dévotion au Prophète en mystique musulmane*. Gallomard.

Post, Arjan. 2016. “A Glimpse of Sufism from the Circle of Ibn Taymiyya,” *Journal of Sufi Studies* 5(2), pp. 156–187.

（原　陸郎　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Rico Isaacs and Alessandro Frigerio (eds.). 2018. *Theorizing Central Asian Politics: The State, Ideology and Power*. Cham: Palgrave Macmillan. xix+319 pp.

1991年のソヴィエト社会主義連邦共和国（ソ連）崩壊から、30年が経過しようとしている。すなわち、ソ連崩壊と共に独立の道を歩み始めた中央アジア諸国（ウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、タジキスタン、トルクメニスタン）も、現在のような国家の形を取るようになってからも30年が経ったということになる。中央アジア諸国の独立当時は、政治体制の安定が急務であった。政治的・経済的諸問題によって発生した混乱を収拾し、独立国家としての立場を揺るがないものにすることが、当時の課題であった。

本書は、独立から現在に至るまでの国家形成プロセスを観察し、得られた経験に基づいて、中央アジアの政治理論分野における議論の深化を目的とした論説集である。中央アジアに焦点をあてた研究は、国際関係から歴史まで数多くなされてきたのは広く知られている。だが政治理論分野に関しては、未だに新しい観点が生み出されてこなかったと編著者のIssacsとFrigerioは主張している（p. 2）。西欧の社会科学的理論や概